
彼女は「終わりの始まり」

shibahuly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は「終わりの始まり」

【著者名】

ZZード

ZZ858BA

shibaharu

【あらすじ】

普通の日常を望む彼女は神崎愛梨。一年間は無事に平穏に暮らせたものの、高校一年生になると同時に異世界に呼ばれてしまった。それは愛梨にとって日常の終わりであり、異世界での「終わりの始まり」であった—— 処女作ですのでよろしくお願いします。拙い文章ですが、読んでいただけるとありがたいです。必ず1週間に一話は投稿するつもりです。

始まりは女子高生

：私は普通が大好きだ。

「人生はドラマチックでなけりやつまらねえ」

というがそんなことはない。

そんなことを言っているは人生が普通な奴だけの特権で、私のような人からすればうらやましい限りである。

ほんと贅沢な話だと思ひ

なくともほとんどの人が、だらう。

非日常と結びつけて考えて欲しくないね。

「でも世の中の人間にはドラマチックな人生＝非日常が成り立つことがある」と思っていいふうに教えた。二つもうひとつは、まつ毛

呆れてしまつ。

イケメン男「君みたいな子、初めてだよ」

地味女「わ…私なんか…あなたなんかにはも…もつたいないよ！」

イケメン男「ほら、眼鏡を外せば」こんなに可愛いのに…。」

地味女「か…可愛い………？」

イケメン男「も「…」生離さない。僕には君しかいないんだ…君が好きなんだ！」

地味女「…」嬉しい…！私もあなたが大好きです！」

そして2人は永遠を誓つのだつた。

——みたいな話や、

地味男「雨に濡れちゃつたね…。ウチ、」つから近いから来る？」

美女「え！？」

地味男「シャワー浴びた方がいいと思つんだ」

美女「じゃあ、お皿葉に甘えて…」

「地味男宅にて」

美女「キャラ何見てんのよーーー！」

地味男「「」めん！タオルと着替えを持ってきたから置いておこうと思つたり…」

美女「つてあんた誰？」

地味男「誰つて僕だけ…。あ、先にふ…風呂入って「ゴメンね…？」

美女「嘘……！？前髪上げるとイケメンじゃん、ヤバい…（惚れちゃつた…）」「

——みたいな誰でも夢見るロマンチックでドラマチックな、非日常的な感じがあふれる簡略化した話がある。

非日常じゃないか？いやいやそんなことはない。ロマンチックでもドラマチックでも私からすれば普通だよ。全然普通だね！

ただ私もさすがにこうこうのはちょっと遠慮かな…。

よくある恋愛ものだけどなんていうか、なんというかうまく言えないな…。

キラキラした人って言つのさちよつと抵抗を覚えちゃうんだよね。

……なんで、とか聞かないでね？わかんないから。

私としては友達とかが話すよつな一般的な普通の恋愛がいいの。普通の。

（たぶん無理だけ…）

漫画や小説にしたとしても、別段面白ことひもなけりや、もはや脇役のカツプルみたいな扱いを受けるようなもので、世間からすれば「大したことない」ような恋がいい。

中学時代にこの話を何度も友達にしたけど決まって「変な子」「つて私は言われる。

そして、つまらない恋をしたい訳ではない、と誤解を解かねばならなかつたのだ。

……言っておくけど、「変な子」と言われるだけの自覚はあるし、

感覚がずれているのも分かる。

だって、住んでる世界が違うんだもの。仕方ないじゃない。

…話しがそれてしまつたね。とりあえず、私が言いたいことはドラマチックな人生 非日常であり、ドラマチックな人生＝普通だよ！つてこと。

ただでさえ私は非日常的な生活なのだ。どう非日常かといわれても秘密なのだけど……。

伏線つてやつなのかな？（言つててハズい…）

女の子には秘密が1個や2個ある方が輝くといつもの、こんな秘密ならいらない。

輝かない方が格段とマシだ。

…ああ、なんて私は輝いているのだろう（涙）

惚れ惚れするよ…

だから普通の生活は昔からのこんな私の願いなのだ。

…。

…。

一 体 私 は 何 に 話 し か け て い る の だ ら ひ … 。

独り言とか…。

6

今 日 は い い 天 気 だ 、 と 私 は 思 つ た 。

今 日 “ も ” じ ゃ な い の は 今 日 ま で の 春 休 み の 間 、 ず つ と 憂 た だ し
か つ た か ら だ 。

見 上 げ れ ば 雲 一 つ 無 い 空 を 見 る こ と が 出 来 る 。

そ の 青 は 今 ま で 以 上 に 澄 み 渡 つ た 色 を し て い て 、 す ず め の 鳴 き 声
も オ ー ケ スト ラ の よ う だ 、 と 私 は 思 い な が ら 、 い つ も (なん て 素 晴
ら し い フ レ ー ズ !) 通 る 街 並み を 歩 く 。

今 日 は 街 並み も 綺 麗 な よ う に 私 は 感 じ た の だ つ た 、 そ れ も そ の は

すだ。

何故なら高校生になつて1年が経ち、今日から高校2年生になるのだ。

ふと、去年を思い返す。（けつこひよく思ひ出すのだが）高校1年生の間は、ありふれた日常（仮）を1年間守ることが出来た。

自分でいうのもなんだけど奇跡だと思つていて、中学時代は秘密がバレてしまつたがために、転校を何回かしなければならぬこともあつた。

毎回転校するたびに悲しくなつて、新しい日常（仮）に出会えるたびに喜んだものだ。

中には秘密を知つても友達でいよいよ転校する必要なんか無いつて！と言つてくれるクラスの子はいたけども、残念ながらサヨナラするしかなかつたのだ。

私にとって、この1年は何ものにも代え難いもので、私の宝物なのだ。

とか、思いながら上機嫌にこつこ（やはり素晴らしいフレーズ！）通う学校前の坂を登つていると、見知つた顔に出会つたのだった。

「愛ちゃん、おはよー！」

と言われ、

「おはよー、綾音」

と私は返す。

「…綾」

綾音が言ひ。こつものやうとつだ、とわかり、

「うん？」

「綾つて呼んでいいんだよ？」

「綾音つて呼ぶ方が可愛いと思ひよ？」

「またまた、恥ずかしがり屋なんだから」

「そんなつもりは無いのだけれど」

その2人の光景に、周囲の生徒はどよめく。

どよめくといつより喜び叫ぶ、といった感じだ。「へつ、新学期初日の朝からをこの光景をながめることが出来るとは…！…グハッ…」「神立コンビ」馳走様です…」「絵になる…」などの声が聞こえる。

そんな風に周りから言われているなど全く知らない2人は学校でもトップの美人と評される。

愛ちゃん、と呼ばれた方は「神崎 愛梨（かんざき あいり）」という名前で、平均的な身長にふわりとした腰まである綺麗な薄ピンク色の長い髪を持つ。

でるところはでているわけではないが、小さくもなく絶妙なバランスがあり、何より肌のハリ、弾力、みずみずしさ、艶やかさ、すべてが完成されているといつても過言ではなく、それから考える美しさはたまらないであろう。女から見ても感動するらし。

そして、普段は態度や言葉遣いなどから比較的クールなように見えるけども、時折見せる笑顔やへましてしまつ様に女生徒からも異様に人気が高い。

ようするに見る人すべて男も女も魅了するプロポーションと性格の持ち主なのだ。

一方綾音という生徒は本名を「橘 綾音（たちばな あやね）」といい、愛梨より背が小さく、サラサラ感あふれる金髪ツインテールの持ち主だ。

金髪ツインテーにしては、無造作といつか作られたかのようなハネ感を持ち、誰もが奇跡だと思ってしまつだろ。実質、愛梨から見ても神々しさを感じるほどなのだ。

ふわりとした唇、整えられた左右対称の瞳、こぶりな胸、スラッシュした足に、そして、男なら皆守りたくなるような可憐さを兼ね備えている。

女子ならば妹を持つたような錯覚にとらわれてしまつだろ。

そんな二人は誰が言つたのか知らないが、「かんざき」の「かん」と、「たちばな」の「たち」で神立コンビと呼ばれている。

きっと、この一人を見たときに受けた衝撃、びびっと雷鳴が轟いたことから付けられたんじやないか、と愛梨は考へている。

綾音は上手いこと言つたもんだ、と笑つていたからムカツとして頭を叩いた。

ファン曰く、綾音のやんちゃなことと愛梨の面倒見の良さのコンボも含まれているのだとか。

神立コンビの「だち」・・・綾音が言ひ。

「愛梨は…」

「わー、挨拶はしたしね。わざと学校に行かねえようか?」

私は満面の笑みとこいつ商業スマイルで返事をする。

「遮られたー?」

と、綾音が声をあげる。

その顔は実に面白くて、可愛い。だからつい私はからかってしまうのだった。

「うーうー」ところが女生徒に妹みたいな印象をあたえ、男子生徒は惚れてしまつたから、そんなことを思いつつ言うのだった。

「気のせいじゃない?」

「嘘ー」

「気のせいだつてば」

「絶対嘘だつて…。久しぶりに会つて、このに私の扱いが少しそんぞこじやない?」

「まあかー私の可愛い綾音にそんなことしないわー!」

「おもこいつありとれてんのですナビ…」

「少し自意識過剰よ?」

「これ、新学期そつそつとする会話じやないつて…。」

「……」

……確かに、と思ってしまった。

確かにつなづける話であるので返事に困ってしまった、必然的にこういった返事になってしまったのである。

「…同じクラスだといいね？」

「話題変えないでよ～！」

「わっ あからい」の話題だけ?」

「…………嘘つや」

さすがにちよつと苛めすぎたか、と感じてきた。（綾音の目が潤んだきたから。）

以外と涙腺が弱いのである。

「ごめん、ごめん。つい、ね？ ただ私は恥ずかしがり屋じゃないし、私が綾音って呼びたいの？ 本当よ？」

愛梨の本音。

「…分かったよ」

「ありがとう。じゃ行きましょ？ 遅刻しちゃひつよ～」

さう返事をして、綾音の頭を撫でて学校へ急ぐ。

「始業式に遅刻しちゃマズいもんねー。」

綾音は一瞬で「いふん」機嫌になつて、愛梨と一緒に急ぐのだった。

「一緒にクラスだ！」

下駄箱前の廊下にクラス分けの紙が貼つてあり、そこには「2組9番 神崎 愛梨」と書いてある。

さりに下を見ていくと「2組20番 橘 綾音」と書かれている。

「やつたね！」

「私と愛梨ちゃんはきっと運命の糸で繋がっているに違いない！」

真顔で綾音は言つ。…運命とか言つて恥ずかしくない？と愛梨は心でつっこみをいれる。

実は愛梨はそんなことを人に言える立場ではないのだが、自分のことを棚に上げていいやつだ。

「言ひ過ぎだつて」

「世界には何十億という人がいるんだよ？その中でこうして同じ学校に入つて、連續で同じクラスになるなんて「運命」しか有り得ないよ！」

「スケールがデカすぎるーー瞬、本当かも、とか考えたじゃないーー」
「いつのときの綾音は手強い。勝てる気がしない、と愛梨はいつ
も苦戦するのだった。

「思考を放棄しては駄目よ。人は考える生物なのだから」

「気がつくと綾音は田の前で私の顔を見上げてくれる。

「…だからスケールがデカすぎるつてーー」

「よく考えて?…そうすれば真理は見えてくる…」

綾音の顔が近づいてくる。近い、近いよ…ーーと思えども言葉にしないといつより出来ない。

何故だか言つことが出来なくて、不思議な力がそういう風に働いてるとしか愛梨には思えなくなるのだった。

周りの女子が騒がしい。だが愛梨は言つ。しかし、綾音に遮られる。

「よく考えるつてーー」

「余計な事は考えないの。考えるべきことは何?真理を視なさい?」

「真…理…」

「そつ、真理」

「……」

「しっかり考えて」

「……………アホらしくこわ」

「あやんー」

綾音の頭にチョップアンド・クルップと背を向けて叫ぶ。

「わいわと教室に行くべきね」

我に戻った愛梨は有無を言わざず綾音を置いて教室に向かう。
…危なかった、あともうちょっとで百合の華が咲くところだった、
と愛梨は思いながら。

…周りを見ると多くの生徒が満面の笑みをして倒れている、気が
した。

「待つてえー！」

…。

愛梨は聞かなかつたことにした。

始まつは女子高生（後輩や）

はじめまして、she is a teacherです。

処女作なのでよろしくお願ひします！

愛梨と綾音がヤバい雰囲気ですが、

愛梨と綾音がG-になるよつにほしませんのでお願ひします！

2 赴く先は死地

「今日はこれから用事があったの忘れてた！一緒に帰れない…」

愛梨に用事など全くなかったのだが、残念なことに学校へ来てから用事が出来てしまつた。

本来ならこの後はお喋りしながら、寄り道しながら帰るはずであった。

一日を自由なことに費やすつもりでいたはずであった。

春休みの疲れを癒すつもりの計画だった。

「用事なら仕方ないね。イツメン（いつものメンバー）と帰らせてもらひつわ…」

綾音は肩を落として言つた。田が潤むほど愛梨と帰ることが出来ないのがショックなようだ。

綾音の愛梨への依存度を再確認をせしめられる反応だった。

「本当に…」

私は顔の前で手を合わせて言つた。

なぜなら愛梨は綾音と約束をしていた。

始業式のために体育館へ行く途中、今日をどうするか話し合って、とりあえず一緒に帰ることを約束したのだった。

「………明日一緒に帰ってくれるならそれでいいから…」

「絶対に約束するーありがとー、綾。じゃあね」

綾音が喜ぶ」とを言つてあげる愛梨。

「…………今なんて……！？……あ、ちょっとー」

さて、もういいか、など考へて今日2度目となるシカトを実行し、机の横にかかるバックを取つて教室を出て行く。

廊下に出ると帰ろうとする生徒で一杯だ。

春休みをどう過ごしていたか聞くものや、新しいクラスに喜ぶもの、部活動に燃えるもの、様々な生徒がいる。

それもそのはず今日は始業式だけだから学校が終わるのがもの凄く早いのだ。

今もまだだいたい10時くらいだ。

加えて友達に話すことがたくさんあるのだろうから、こんな雰囲気になるのもあたりまえなのだろう、と愛梨は考える。

周りの生徒にとつて廊下にいる美女、愛梨にとつての春休みはそれはそれは非道いものだったの話したいことなんか微塵もない。そのことを知らない綾音はもちろんクラスの女子、男子全員から春休みをどうしていったか愛梨は質問責めを受けていたのだが、若干キレたのか机を叩き「言いたくないの。それ以上聞かないでね」と笑顔で言つて黙らせたのだった。

その時、その笑顔に威圧されたクラスのみんなは愛梨を怒らせるとマズい、と思つたのだった。

ただ、それだけではないようで、廊下に愛梨が出た瞬間、空気が変わる。

愛梨も自分で知るよつにこの姿なのだ、視線が集まるのも当然であるだろう。

なんて言つたつて学校のアイドルが歩いているのだから、男も女も目が釘付けになるのだ。

女から見ても見惚れてしまう程の美しさを愛梨は持つているのだ

からなおせりだ。

愛梨は周りを見渡すわけではないが前を向きつつ周りを確認する
と、私以外は時が止まっているようだ、と思った。

「つかり触つてしまえば、石のようになつて倒れてしまつので
はないか、と思つてしまつほどらしー。

……ちやんと生きてるんだよね?と思つ愛梨。

扉を開く。

油が刺さつていなためにギイ、と音がする。

「これは……何の因果だよ……」

苦い顔をして思わずそうつぶやいた。

今愛梨がいるのは学校の裏手にある使われなくなつた旧校舎——
——といつてもそこまでの古さは感じさせず、今は部室棟として使わ
れている——の旧音楽室にいる。

ここは防音設備がないことと夏場は物凄く熱く（暑く、じやなくて
熱く）、冬場は何故か外より寒くなるためにどこも使っていない。
別名「呪いの音楽室」とも呼ばれているほどだ。

生憎^{あいにく}今日は始業式、つまり4月ということもありそこまで寒くは

なかつた。

愛梨は今朝学校へ来たときに旧校舎から感じた漂う不穏な気配が氣になつて、学校が終わつてからすぐにつくに来たのだった。

すると音楽室の部屋の真ん中には何がが描かれ光つてゐる。見るとそれは漫画でもよくある魔法陣らしきもの、円の中に五芒星の描かれたやつだ。

「確實に私を呼んでる……。で、これは行かなことマズいパターンか」

と言つて一步近づいてみる。

「光が増してゐる……。やだなあ……なんで私なのよーって言つてもしゃあないのか……これも仕事だから最悪なのよね……」

「……2年は無かつたのになあ……と、嫌そうな顔をしてそう思いながら、愛梨は手を真上に挙げる。

すると、愛梨が4人現れる。

厳密には少し雰囲氣や容姿が違つてるので愛梨亞種といつたといふが妥当だつ。

「本体は呼ばれてゐるわ。あつちに行つてゐる間、こつちは任せたわ」

わたし
本体は言つた。

「なんて可哀想な私」

濃い藍色の髪の私が言つ。愛梨の髪のサイドを白のリボンで纏め、

真ん中で一つに纏めてくるのだが、田のリボンで長く纏めてくる。

「…右回り…」

赤い眼鏡を掛けた深緑色の髪の私の言葉。
長い愛梨の髪をサイドで一本に纏めてくる。

「私よ、お前の分まで田舎を楽しんでやるよ

赤い色、とこうむしの紅の色をした髪の私が言ひ。
ポニー テールをしてくる。

「代わりに私が行つてもよくなつてよ?」

綾音には負けるが金髪の私。
お団子ヘアーデ、一本の桜を表すような簪が刺さつている。

「…分身にそんなこと言われるなんて、私も墜ちたものね。でも、
本体をなめないでね?」

…どうやらまだ消えたくないようだ。本体の放つた威圧にジックシ
と反応する分身ども。

「あと懸念材料は綾音だけ、か。…綾音にはなんて言ひ…

綾音と明日一緒に帰る約束を忘れる訳には行かなかつたが、これ
ばっかりはどうしようもない。

そのことに頭を悩ませながら、愛梨は魔法陣思しきものの中へと踏み込んでいくのだった。

〔世界は迷つた挙げ句の果てに決断を下す。〕

〔神を見放したのだ。〕

〔人を見放したのだ。〕

〔しかし、世界は彼等に最後のチャンスを与えるのだった。〕

〔神も人もそうとも知らずに――――〕

〔世界自身でさえどうなるかは何も知らない――――〕

「私がよくある異世界もののように異世界に迷はれて転ぶと思つなよ！」

「なめんなー」と頭上に叫んだ。

「こにはどうやら異世界のようで、まず空がよどんでいる。

森は混沌として周りに存在し、辺り一面に見知らぬ生物一もとい俗に魔物と呼ばれそうなものがいる。

雑魚から強そうな魔物？まで種類豊富だ。ザックとつむはくだらないかも、と愛梨思った。

…全員「ひいらぎ」を見て「この氣がするのは氣のせいだ、と考えたい。

「ちよ…ちよっと、このパターンは何…？普通最初つて始まりの街的なところの近くの森とかじゃないの…？目の前に邪悪な感じの城が建つてんすけど…？まさか「」で最終ステージ…？」

普段ならば絶対しないであろう反応。このあと愛梨は「」振り返つたのだった。

「キャラ崩れしそうだった…。なんて恥ずかしい…。あいつ等や綾音には決して見せらんない…」

…きっと綾音が見ていたら萌え、分身が見たらドン引きなのだろうと考えた。

そして、魔物どもが襲つてくる。

「なんて手厚い歓迎！…？」

跳ぶことで魔物達の突撃をかわし、そのまま集団の外に着地する。

「…ふう。私つて相変わらずモテモテね。魔物みたいなものにまで好かれちゃうなんて」

跳んでいる間に冷静になつた、キャラを元に戻した愛梨は余裕を持つて皮肉を言つ。
相手が聞いているのかどうかは知らないけど。端から見ると独り言だ。

魔物どもの攻撃が当たらないよう間を空けてかわす。

かわすと闘牛のような角の付いた生物が突進して来るのでそれを跳んでかわす。

愛梨が避け続けると、一向に攻撃が当たらないことに段々と魔物どもが苛立つてることがわかる。

さて、どうしたものが、と考える。

愛梨なら魔物アイツルどもをぶつ飛ばすことも出来るし、逃げ切ることも可能だけどもぶつ飛ばすとなると実力を出さなければならぬし、逃げ切るにも実力を出さねばならない。

相手が雑魚だけでなく強そうなのもいるからたちが悪く、きっとゴイツらは私の実力を量るために用意されたものに違いないと考へつぐ。

「Jの世界に飛ばされたばつかで力を見せせるのも癪だし、普通に逃げて臆病者と思われるのも嫌なのだろう。

愛梨は集団の中に突っ込みながら言い放つ。その目はとつともなく鋭い目だった。

「精々死なないようにな?」

まずは雑魚そうなゴブリンもどきを殴る。ゴブリンもどきは石に当たつてふつ飛ばせはしなかつたが、倒すことは出来た。すると愛梨はすぐにしゃがみ込むと、頭上にオークもどきの拳が飛んできた。

後ろに目が付いてんじゃないか、という動きで避ける。そして、しゃがんだ際に放つた足払いを転ばし、その足を持つて投げ放つ。

「ううああああー！」

オークはだいたい愛梨の2倍くらいの大きさがあり、普通は投げることなど出来るはずも無いのだが実際投げられていて、飛ばされたオークに雑魚の何体かが押しつぶされた。

その隙を見て、横からやつてきた鋭いくちばしを持ったコンドルもどきがオークを投げた愛梨を狙うが当たらず、首を掴まれそのくちばしは愛梨ではなくオークの心臓を突き刺していた。

深く突き刺さった為コンドルは抜け出すことも出来ないし、既に絶命していた。

それを見ていた他のコンドルが複数で四方八方からやつてくる。たくさんの敵なら相手も手も足も出ないのではないか、と考えたかのような動きで物量作戦に出たのだ。

しかし、攻撃は当たらない。そのくちばしが当たるのは他の魔物だ。

コンドルは驚いていたが、愛梨はまだコンドルをすべて逸らし、四方八方へコンドルを放つただけだった。

全てをヒットさせ、4つの残骸が完成される。

愛梨の鋭い眼光が新たな敵を睨む。

一足歩行の剣と盾を持つたワニ、リザードマンのような生物が愛梨に向かって剣を振りかざしていく。

それを跳んでかわし、近くのゴブリンを踏み倒して着地する。

横から仲間のゴブリンが一斉に襲いかかってくるも、愛梨の田の前にいる1体の頭に手を置いて跳ぶことで難なく避けてしまつ。田の前から敵がいなくなつたのに驚き、止まつとじよつとして既に遅く、ゴブリン達は相打ちになつたのだった。

愛梨は相打ちになつたゴブリンどもには目もくれず、跳びながらリザードマンを観察すると、固い鱗を持っていますのうなで簡単に

は倒せなさそうだと判断する。

だからと云つて愛梨は別の敵に目標を変えない。

手にゴブリンを掴んだまま、リザードマンへ走りだす。走るのを妨害しようとコンドルが複数突撃して来るが、もう一方の手と足を使ってあしらいつつも走る。

その様子を見たリザードマンが再び剣を振りかざそうとして来るが、手の中のゴブリンをリザードマンの手に投げつけて撃退する。その衝撃でリザードマンは痛みに叫びながら手を放してしまい、手から剣が落ちる。

それを見逃す愛梨ではない。

落ちていく剣に向かつて跳んだことで見事に剣を手に入れた。そして一瞬のうちに30もの魔物が絶命するのだった。

その光景はもはや殲滅に近い。

魔物どもを殲滅していき、どんどん死骸が増えていく。

その上愛梨は息一つを切らしていない

しかし、新たに闘牛らしきものを切つたところで剣を手放すことになってしまった。

目の前を炎が駆け抜け、剣を溶かしてしまったのだ。

愛梨はすんでのところでかわしたため被害はなかつたけれども、その射線上にいた敵は消えてしまったのだった。炎を出した相手の正体はすぐにわかった。

2赴く先は死地（後書き）

うーん…

SAOみたいにバトルシーンとかが書けたらいいなあ

3 必ずしも人が助けてくれるとは限らない

「はあ」

綾音は溜め息をつぶ。

「綾つてば溜め息多すぎだから」

綾音の隣を歩くポニー・テールの子が言つ。

彼女は綾音といふと震んでしまうが、まあ神立コンビがおかしいだけなのだが、2人がいなければトップにも入る可愛いさだらう。

愛梨より少し背が高いくらいの身長で、愛梨と同じように面倒見のよいお姉さんといった印象だ。

でるとこがでていて、それを見るたびに綾音が愚痴る。だが、今の綾音はそれどころではなかつた。

「だつてえ〜」

愛梨が一緒じゃないんだよ〜といつて畠聲音の入りの綾音の台詞である。

「そんなにあたしらと一緒に嫌か。確かにあたしらじゃアイツの代わりは出来ないもんな〜」

「…違つて〜、全然嫌じゃないって! 時雨じくといふのは楽しいよ?」

「じゃあ僕は論外、話にすらならなってことだね?」

「違うもんー。霧もちやんと好きだからー。」

霧と呼ばれたのは時雨の隣、愛梨の隣の隣といつことだが、ロングストレートな髪型をした子のことだ。
中性的な子で、背も175もあるためか男にも女にも見えてしまう。

一応女の子だ。だけど知つてもなお見間違えてしまう。
綾音はいつも、宝塚でやつていけそうな子だ、と思つてしまつ。
眞偽は不明だけど話しによると、何度かそつち系でいかないかとか声を掛けられているとか……。

「ふふ、ありがとうね。でも、一番好きなのは愛梨さんでしょ?」

「わうわー。」

霧のセリフに綾音は間髪を入れずに、ツインテールが浮かんでいるかのように可憐に振り返りながら答えた。その様子は幻想的であった、が。

「そ……即答かよ!？」

綾音が百合かもしれないといつことを既に知つているにも関わらず、驚いたそぶりで時雨が叫び。

「即答よ?」

とも当たり前のような綾音の返事。

「さすが本妻と言われるだけはあるな」

綾音が一部で呼ばれている名だ。（主にファンクラブの方々）

「失礼ね！私の名前は綾音だよー！」

「百合音の方がお似合いだ」

「百合を馬鹿にしないでー！百合がかわいそうじゃないー！全国の百合に謝りなさいー！」

「……………どうの意味かな？」

名前に百合の付く人という意味か、そつちの「百合」の人という意味か、といつことである。

「どうちー…名前に決まってるよー…」

「あはは、綾音ちゃん、既に認めてるよーー！」

霧が笑い、時雨が諦めた顔で言つ。

「負けたよー…もつ煮るなりなんなり好きにしてくれ」

「じゃあ、時雨の名前が百合…」

「それは勘弁ー！」

影からこいつぞり見ていた愛梨亞種の一人は言つのだった。

「…見つかつたら…死…」

もし綾音に見つかつたならば、容姿がそつくりなわけだから百合の対象になること間違い無しであり、絶対にバレないよう隠れないと…、といつことである。

そのときつい、バレた時の事を考えてしまって

「…勘弁…」

と駄々のだった。

「…それは勘弁！」

また炎が飛んでくる。しかも複数。

「物語の序盤で遠距離攻撃はないって…！」

炎が飛んできた後に続いて、雷や水の弾、風の刃が嵐のよう飛んでくる。

飛ばしてきた相手は色のついたスライム群とこうよりゼリー状の集団に、複数のゴースト、ゴブリンの上位種と思しき赤いゴブリン達。

そして圧巻なのが、

「竜ですか…。てっきり様子見だけだと思ったのに」

黒い竜である。オークの5倍くらいの大きさで、一番強力なもの を撃つてくる。中でも黒い弾は威力がヤバそうだった。

戦況は、愛梨がその他多数が撃つてくるものは避けたり相殺して なんとかかわすのだが、黒い竜の放つのは速度が周りより格段と早 く、いつ当たつてもおかしくない状況であった。

すると、炎と水弾と雷が相殺しようとしてるところに黒い竜が黒 い弾を撃つてきた。

その炎は雑魚の放つものを飲み込み、隙の出来た愛梨に向かう。 ちょ… これは無理、と思つたのと同時に黒い弾を喰らつてしまつ たのだった。

直後、黒い竜以外の敵すべてが音もなく消え失せる。

愛梨は倒れてはいなかつた。ただ、その場に立ち尽くしていた。 身体中あちこち傷ついてボロボロだし、学校の制服もボロボロだ つた。

生きているのが奇跡であろう。

そんな愛梨は目を虚ろにしながら、何とか必死の思いでよたよた 歩き、何かを手に抱き抱えて倒れてしまつた。

手の中にいたのは、小さな黒い竜だった。

さつきの黒い竜がまるで時間を巻き戻したかのように子供になつ ていたのだった。

小さな子供の黒い竜は愛梨の手の中ですやすやす眠つていた。

そこは悪夢だった。どこもかしこも燃えている。
空は赤く、黒い雲がこの世ではないことを連想させてしまつ。
剣や盾などの武器も転がっているが、すべて壊されている。
生きている人はおらず、地獄の真ん中にいるのはただの人外だけ
だった。

死体の山の上にいるのだった。
右手には大鎌、左手には剣を持ちたたずんでいる。

その顔は笑っていた。

瞳は血を吸つたかのように赤い。
髪も血で真っ赤になつていて、
着ているローブのようなものも深紅に染まる。

笑う。

ただ笑うだけだった。

どれだけ笑つていたのだろうか。考えることもない。

笑い声は止み、燃える音だけが世界に聞こえる音だった。

そして、世界はガラスのように砕け散り、消えた。

人外を残して。

その日は、泣いていた——

見たくもない、見ることもないと思っていた夢を見た。
目を覚ますと、身体中汗だらけだった。

「ここは……？」

だけどそれよりも、ベッドで寝ていること、知らない場所にいる
のに疑問を持つ。

攻撃を浴びて、倒れたのではなかつたのか？と愛梨は思う。
そして、倒れる時、手に何かいたような……と気づいて身体を起
こす。

「あの小さな黒い竜は……？」

手には何もない。まさか……と愛梨が考えたとき、

何かに頬を舐められる。

「良かつた……！」

頬を舐めたのはその黒い竜だった。
まるで自分の親がやっと起きて喜んでこむみつだ。

「まるで、じゃなく私が親……か」

あの時あそこにいたのは愛梨とこの小さな黒い竜のみ。
それは不覚にも愛梨が自動迎撃オートカウンターを発動させてしまったためだった。
そしてその影響であの小さな黒い竜も子供にまで戻ってしまった
のだ。

だから子供のあの竜からしたら田の前の私が親だと思つたのだろう。

自動迎撃オートカウンターの手加減出来たから良かつたものの、もう少しで済してしまつといつた、と反省する。

「……召前、決めよっか」

頭を撫でてあげながら言つ。

「じゃあ」

愛梨の言葉に反応する。

「竜というのは知性が高いのだろうか、と考える。
これが噂の『都合主義』とか……などとは決して考えてない、はずだ。
愛梨は竜の知性について考えるのを止め、召前をどうするか考え
る。」

「う～ん…。そもそもあんた、男?女?どっち?」

「わわわ」

…わかんないよ、と嘆息

「男じゃよ、男」

一人の老人が部屋に入ってきて言った。

「誰?」

愛梨はとつさに警戒する。

「村人その一つでござんな」

「… そうですか」

「それが助けてくれた相手に対する態度か?何か言つ」とがあるだ
るついに」

「… 助けてくださりありがと」わざわざ

愛梨は警戒心を緩めず、老人を睨み付ける。

「… そんなに睨まないでおくれ」

「これが元々の田つきなのですけれど」

この老人はおかしい、と愛梨は思つ。

この老人の纏う空気は戦つていた魔物たちのそれを凝縮したようなものだ。

「コイツは絶対に人ではない、と愛梨は思つた。

これが人間なら驚きだろう。

「ほう…分かるか。人に化けるこの魔法を見分けるとはなかなかやるではないか」

老人は愛梨の視線から自分の魔法がバレているのに気づいた。

この老人によると、使つていたのは肉体変化魔法らしい。

しかも構造体そのものを偽装、変化させる魔法を見破る存在など世界には数えるほどしかいないというが、気配や精神までは変えられないのだろう、纏う空気が違つたため、愛梨でも即座に見破れたのだ。

「ほめ言葉として受け取らせていただきますね？」

「フォツフォツフォ。面白い人じやー!ワシの名はストラトス。魔王としてこの世に君臨しておる」

…やっぱりか、と愛梨は思った。

「…あんなどこで倒れて、運良く出会つ人なんてあなたみたいな人だけだものね?」

「魔王城からのワシの殺した気配も分かつておつたか!これはなかなかいい拾いものじやのつ!」

「オオッ！ オオッ！ フォ、と老人もとい魔王ストラトスは言つ。あれで殺していたの？ と愛梨は啞然とした。事実、ガンガン伝わつてきいていた。

「その上、ブラックドラゴンまで手懐けているのならなおさら、じやな。…よし、魔王たるワシ自ら名前を付けてやる。ブラックドラゴンだから……ブラックで！」

「えいやー！」

…まさか、嫌なのか？ ワシが付けた名前が…、と魔王は拒絕された。

ブラックドラゴンがそっぽを向いたからだった。

「和訳して『クロ』でいいわよね！」

犬につける名前のような感じだが、ブラックドラゴンは大層喜んでいた。

「よろしくね、クロ？」

「えいやー！」

ブラックドラゴンの子供の名前はクロに決まったのだった。

地面上手をつく魔王がそこにいたのだった。

「ば…馬鹿な…」

閑話休題。

話は戻つて、本題に入る。

「しかし、よくもまあ魔王が人を助けましたね？」

「仕方ないではないか。普段なら有り得ない、交わる事もない「神様」とやらからの頼みごとらしいからの。それに老後の楽しみだと思つただけじゃ」

愛梨が魔王と言葉が通じたりするのも神様とやらの恩恵なのだった。

仕事に支障をきたさないようにしてこのお節介である。しかし、愛梨はそのことまでは知らなかつた。

「で、お主は何者じや？」

「…仲間と来てたら魔物？モンスター？の大群に襲われまして…关口はそのときに…ってことでお願い出来ませんか？」

「曰く付きか…いいじやろ？」

私は商品か…と愛梨は心で突つ込むのだった。

「なんせ、ワシも随分退屈しておつたから」

ついでに世話をあげる、とこう訳である。

これも神様とやらの頼みごとのうちなのだろう、と愛梨は思ったが素直に受け入れることにした。

「袖振り合つも多生の縁つてやつよね…袖が触れ合つのはこれからなのだけれども」

「そこから魔王城に一週間ほど滞在をせてもいいった。

「……言ひてもぐが、決して愛梨は綾音のことなど忘れているわけではない。

この世界と現実世界は時間がずれているからだ。

愛梨はそのことをちゃんと知っていたから、一週間もいたのだった。

あつひの世界ではやつと一日が終わったといりだつた。

……最後の方は綾音のこと覚えていたか、怪しかつた。

クロのところで愛梨は頭がこいつぱいだつたのだった。

4 魔王の役目、愛梨達の役目、兵士の役目

「一週間ありがとうございました、ストラトス」

「さやひ」

愛梨とクロは感謝を述べる。

これから愛梨とクロは共に旅立つのだ。

それはストラトスのところに長い間滞在するのも無礼だし（ストラトス寧ろいてほしいようだつたが）、現実世界のこと、綾音のこととを含めてのんびりするわけにもいかなかつた、といつ理由もある。

「魔王に挨拶なんかせんでもいいのじゃぞ？」

「偏見でものを言つのはよくないと私は思つたよ。クロみたいに、ね？」

ストラトスは今でこそ爺の姿をしているが、本来の姿はもっと大きくだいたい奈良の大仏並みにデカいらしい。私達に合わせるために姿を変えてくれたのだった。

魔王、と聞くと極悪人で人間を滅ぼし、魔物で世界征服を自論むような印象がどうしても強い。

しかしこの世界だと文字通り「魔物の王」ということらしい。

愛梨のストラトスへの印象は「強すぎるお爺さん」というイメージだったからどうしても魔王といつのに抵抗を感じていたのだ。しかも意外と優しい。

ストラトス曰わく、

「人との均衡を保つのが魔王の役目での。無理に人間に手を出すとその種族が滅びかねんのじゃよ。数は有れども頭がなきや話にならん。…ワシ等などより人間の方がずっと魔物じやよ」

とのこと。魔物はどうしても相対的に人間より知性が劣つてしまつからこうして魔王を立てることで種の保存に力を注いでいるのだという。

そのためにかれこれ五百年ほど魔王をしてるとか。

新たに魔王が出ないのは「人間なんかに負ける訳がない」という思いが魔物の根底にあり、聰い奴は人との関わりが嫌ということでも魔王には出来ないし、なりたがらないのだった。

ということで、愛梨はそれなりにストラトスへ好意を抱いていたのだった。（尊敬する人として）

だから愛梨はストラトスにちゃんとした礼儀も行うのだった。

そしてクロことブラックドラゴンは基本的に人が大嫌いであり、見つけたら即座に攻撃するらしい。

そこから気性が荒いなどと誤解を受けている。

昔ブラックドラゴンは人間に裏切られ、大量の仲間が死んだ。その日からブラックドラゴン達は人間のことは信用しなくなり、殺されたくないから殺される前に殺し始めたのだとストラトスは言つ。であるからして、人間に懐くクロは初めてのケースなのだ。そういうた背景を含め、偏見は良くないと言つたのだった。

「餓別じや、これを持つてけ」

ストラトスが愛梨に何かを投げる。

それは杖だった。しかし杖にしてはちょっと長く氣がある。

「ストラトス、これは何よ？」

「宝杖」道化の冠《クラウン・クラウン》、いや。随分昔の時に人が使っていた杖と剣の複合武器での、見た目からは分からんが中には剣が含まれていて便利な代物じゃよ。既に所有者は愛梨じゃから安心じゃ」

「嬉しいけども、またなんと名前が中一なのかしら…。名は体を表すのだから仕方ないけどもね…」

愛梨は呟く。ストラトスは中一といつ言葉が分からなかつたらしく、特に何も言つてこなかつた。

そしてストラトスは用意を終えたのか、別れの挨拶をする。

「それでは愛梨、クロ元氣でな。何時でも遊びに来て良いからのー。」

「じゃあねー、ストラトスも元氣でねー、くれぐれも勇者に倒されないようになー！」

「わやつがわやつー！」

そしてストラトスの用意した転移魔法陣にて愛梨とクロは旅立つのだつた。

「わ、これからどうなるのか楽しみじゃな…」

「着いた！」

「ぎやう

ストラトスに送つて貰つた場所から徒歩5分。
目的地であるゴグド村に着く。

この村は歴史上始まりの地とされ、世界の誕生もゴグドの地だと
言われている。

そして魔王に立ち向かつた勇者の半分がこの村出身らしい。

しかし、その割に村自体は大したことではなく、唯一「勇気の祠（
ゆうきのほじり）」と呼ばれる祠がひとつそっと静かに構えているだけ
であった。

愛梨はこの村に勇者を探しに来たのだ。

始まり、というフレーズに惹かれたのも否めないが、勇者を見つ
けるためにこの地がピッタリであったのが最大の理由である。

愛梨と愛梨の頭の上に座るクロは、村で一番大きな家である村長
の家へ行こうとする。

と、やはり、であるけれども村の住人達からの注目を浴びる。
気にしてたらキリがないので愛梨とクロはさつさと村長の家へと
向かう。

「すいません

家の扉が開いていたのとそのままは入り直つ。

「どうしたのかしら?... と知らない子ね、旅人かしら? それとも冒険者?」

「」うちを振り向いた女性が言つ。

「... 私達は旅人ですね。どうも初めまして、私はアイリ、頭の」の子はクロといいます。用事でしばらぐの間ユグド村に滞在しようと思いました、その話を伝えにきました」

「私はユグド村の村長でミレーヤよ。よろしくね、アイリ、クロ。あら、その子は...」

頭のクロのことだわ! やっぱり分かっちゃいます? と聞くと

「珍しい訪問者と思つていたけれど、本当に珍しい訪問者だわ。まさかブラックドラゴン連れだなんて夢にも思わないわよ!」

「これには事情があることを伝えると

「ま、とつあえず歓迎するわ。アナタ達はどこに泊まるのかしら?」

「... お金を無くしてしまって、どうにか出来ないものか、どこへ来たのが本当の理由です。」

「」う、愛梨はお金を全く持つていなかつた。

「... お金無くしてしまって、どうにか出来ないものか、どこへ来たのが本当の理由です。」

クロもやべー忘れてた、と言わんばかりに手で顔を覆つていた。

「いいわ、私の家に来なさい。今ちょうど部屋が一つ空いているのよ。ただし、タダではないからね」

とりあえず宿泊先は問題が無くてよさそうだ、とアイリは思った。

「ありがとうございますー。タダだとは思つていませんからよろしくお願ひします」

「さや、さや」

愛梨はクロと一緒にミレイへ感謝をする。

その日、ミレイに村のことを教えてもらい、住人達のことなども教えてもらった。

別に住人のことまで教えてもらう必要は無かつたのだが、村長の家の周りには沢山の住人ほぼ全員がいたため、ついでに教えてもらったのだ。

帽子とかでもかぶつてくれれば良かつた、と後悔する愛梨だった。

今日は村長の家から出られないと分かつた愛梨はクロの相手をして一日を過ごしていたのだが、住人達は歓迎パーティーを開いてくれるらしく、愛梨は出ないわけには行かない状況に晒された。

きっと村人達は私を見るために計画したんだろうなあ、と愛梨は思つたのだった。

実は愛梨の言つとおりであり、その日、村人達は愛梨が家から出てこないのに気付き、どうすればいいのか全員で考えていた。

すると「歓迎会を開けばいいじゃない」とミレイ村長が言つたことで村人達の心に火がつき、パーティーになつたのだ。

愛梨がミレイを恨むと、

「これも仕事だから

と言つて愛梨は何も言えなくなるのだった。

パーティーで死ぬとか、洒落にならないんですけど……、と愚痴を聞いてくれるのはクロだけだった。

何故なら住人達からの質問責めに踊りの誘い、愛梨の取り合いつい、ナンパなどがあつたからだ。

特に辛かつたのは、愛梨のちょっとした行動や一言で問題が起きることだった。

何があつたかご想像にお任せします。

そしてクロも物珍しさから愛梨と同じ皿にあつたからだった。

…一週間経つてやつと落ち着いたとか。

そして、言わすもがな梨とクロは村のアイドルとなるのだった。

…期間限定ですけどね、と愛梨はクロに言つのだった。

「うちでも新たにアイドルが出来ていた。

「…神崎実梨、よろしく…」

「！」ともよろしくへねーあ、綾音つて名前だけど、綾でいいからー。」

田を輝かせた綾音の言葉。

「！」のアホはほつとこて、私は時雨だ。よろしく

「僕は雲だよー、よろしくねー。わつきは凄かつたねー」

時雨と雲が言つ。

今、綾音達は学校からの帰り道だった。

しかし、いつもなら一緒に愛梨のポジションには、別の愛梨がいた。

正確に言えば、愛梨亞種の一人で髪が深緑色に赤い眼鏡の愛梨亞種だった。

「愛梨の双子の妹なんてね、初めて聞いたわ」

「しきかそ、愛梨は本家に戻つて、しばらく学校には来れないなんて」

時雨と雲が言つ。

愛梨亞種達は本体の不在をどうよつか話し合つた結果、本家に呼び戻された、ということにしたのだった。これを決めるのに随分時間がかかったのだった。

「しきかそつてなんだよ」

「よく言つてくれましたな時雨ちゃん。しかし、としがもを合わ

せた僕が考えた言葉や~」

しかしながら、しかもにも聞こえない~?と言った雲。
ところが、綾音は不機嫌になつていて。
愛梨のことを思い出したのだ。

「愛梨が約束をまた破つた……」

愛梨亞種の実梨は姉の代わりに言つ。

「……姉は物凄く申し訳なさそうだつた……。しかそ、本家からの呼び
出しがないので仕方ない」と……」

「実梨ちゃんがさつやく使つてくれた~」

雲が物凄く喜んで~いる。
その光景を見て綾音は、

「ふふ、愛梨に似てるわね。実梨ちゃん、ありがとう。私を元気付
けようとしてくれて嬉しいよ~」

「……どういたしまして……綾音……」

「んもう~綾でいいよ~」

「……綾……音……」

「……さすが愛梨の血を引く双子だな。恐ろしいくらいだ」

「んふふ~、綾音の扱い方を知ってるね~。愛梨ちゃんもいたら、

面白いんだらうなー

時雨と霧は肝心な部分は一緒に愛梨っぽさを感じる。

「…神崎家はあたしをあだで呼んじゃいけない規則でもあるのかな？」

ショックやうに見えて、嬉しく思つ綾音だった。

「」との始まりは遡ること八時間と三十分前。
伝説となつた「実梨ショック」は起きた。

その日は学校中に衝撃が走つた。

新しい転校生が来たといつ。

しかも美人らしい、といつことぞれなりに男子が盛り上がりつ
いた。

女子は男ではなく女が来ると聞いていたからいつものトンショーン
でいた。

しかし、一人の女子が教室に入つたとたん、顔を真つ赤にして倒
れてしまつたのだ。

「おい、どうした！？何があつた！？」

と男子の声。

「ひーひな！大丈夫！？」

と倒れた女子の友達。そして近づいて安否を確認しようと気づく。

廊下に男子、女子が無数に倒れてしまってはなし、全員幸せそうな顔をしていた。

「ひつ
」

それにつられてクラスの連中も廊下を見て驚く。

「て……転校生は……かん……だ……ち……ガクツ……」

「ひな？ ひな！ ひいなああああああああああああああ！」

教室で倒れながら、その生徒は最後の言葉を紡いだ。その顔は幸せそうだったと友達はいう。

転校生は神立一ノヒ並みに可愛いと言いたが、たのたたかく、ラスの連中は思い決死の覚悟（散つていつた仲間のために）を決め、転校生のいる教室へ向かつた。

すNeJ

「隊長！偵察部隊がやられました！」

「馬鹿なつ！？あやひ～がやられただと！？基本的に神立コンビレベルではないと反応しない、あのあやひ～がか！？」

「た…隊長！神崎愛梨ファ…ンクラブの会長までもやられていいとの

報告が…」

「なん…だと……？ 愛梨ファンクラブ会長は愛梨様だけに全てを注いでいたハズ……あやつは綾音様にも反応せんかった強者だぞ…？」

「既に愛梨ファンクラブは全滅しております……」

クラス全体といつかの部隊全員が言葉を詰まらせる。女子なんかは戦々恐々としている。

そこにはまたクラスメートがやってくる。

「隊長…」

「どうした…？」

「恐れながら申し上げます。今日は……全校集会だそうですが…」

「…」

全員がハモる。

みんなもう終わつた…、といつ顔をしている。

隊長は言つ。

「クソッ、上層部の連中は何を考えている…？ 我々に（萌え）死に行けばどうのか……」 つしている今も、兵士達はどんどんやられてしまつていいところに……」

上層部とは教師達のことである。

一週間に一度の全校集会なのはいつものことである。田代は全

くされていない。

伝令！と（萌え）死にそうになりながらまた一人やつてくる。

「そ……最終防衛ラインが突破されました！」

全校集会の行われる体育館は転校生の方が遠い所にあるため、転校生はクラスの前を通らねばならなかつた。

しかし、その報告は既に遅かつた。

「各課、衝撃に備え…………ゆ…………ニバアアアアアアアアス……」

クラスは全滅してしまつた。特に眼鏡を掛けていた隊長は、眼鏡がぶつ壊れていた。

でも、いい顔をしていたのだった。まるで本望だと言わんばかりに……。

……どんな衝撃……だよ……、と実梨は呟くのであつた。

その日、あまりにも多くの生徒が保健室送りとなつたため、全校集会は中止となつた。

前代未聞だというのは当たり前か。

その後、なんとか一日が過ぎ去り、実梨は綾音達を誘い一緒に変帰るのであつた。
話は元に戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858ba/>

彼女は「終わりの始まり」

2012年1月8日19時52分発行